聖眼の魔術師

ギルバート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖眼の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ５８７３Ｚ

【作者名】
ギルバート

【あらすじ】
１つの学園から物語は始まった。
魔術師、魔法使いが普通とかし、獣人、人外が当たり前にいる世界。
※更新は気分で行います。

prologue

５００年前そこから物語は始まった

人界・天界・魔界の三つが争い戦った

三界大戦

それにより世界は一度崩壊し、ひとつの世界となった。

三つの世界が混ざり、すべてが変わった。

魔法使い、魔術師、巫女

獣人、天使、人外

そんな者達が、住む世界となった。

幾年を越えて世界は安定の方向へむかっていった。

もう二度と三界大戦をおこさないためにも、さまざまな協定が結ばれた。

そして５００年後の今、１つの学園から物語は始まった。

ファルバーレ魔法学園、物語の幕は開かれた

第1話

桜舞う坂道。

そこには多くの歓喜と笑顔で溢れかえっていた。

坂を登りきった先には大きなアーチ。

そこのモニターに映しだれている『新入生歓迎』等の文字。

アーチをくぐるとそこに待っている巨大な建物。

『ファルバーレ魔法学園』

多くの人は希望と期待と不安を胸に学園に入っていった。

そんな光景を学園の屋上から冷たく、それでいて寂しそうに見ている少年がいた。

青髪、碧眼の少年の名は『ジーク・ロイデン』

今年からこの学園に転校生としてやってきた。

ジークはフェンスに身体を預けると空を見上げた。

一羽の鳥が飛んでいた。

不意に屋上の扉が開かれた。

「ん？珍しい、先客がいる。」

現れたのは赤髪の女性。スレンダーな女性は微笑みながらジークに語りかけた。

「この時間にいるなんて物好きね。」

女性はジークの隣に座った。

「・・・・」

ジークは警戒し、何も言わなかった。

「ふぅん、まぁいいや」

「・・」

ジークは問いかける訳でもなくただ時間が過ぎるのを待った。

ーゴーンゴーンー

学園の中心にある時計塔が9時を指した。

「いいの？入学式始まるよ？」

「・・あんたはいいのか？」

「私は行くきないからいいの・・」

「そうか・・」

ジークはそう言うとフェンスを飛び越えどこか行ってしまった。

「ちょっと！」

――――――――――――――――――――

―ファルバーレ魔法学園・職員室―

職員室の一角の待ち合い室そこに一人の少女が退屈そうにふてくされていた。

ピンクの髪をした少女は、ソファーに座りながら紅茶を飲んでいた。

そこにジークが扉を開けて現れた。それに対して

「遅い！全く…」

「そこまで迷惑をかけたつもりはないが？」

「あんたこんなとこに一人でいろって言うの？」

少女はティーカップを叩きつけるように皿に置くと一人の女性の教師が現れた。

「こんなとこで悪かったわね。まぁ、座って。」

教師はジークを座るように促すと向かい合うソファーに座った。

「ジーク・ロイデンとシルビア・デュランドでいい？私はトリエラ・

クルーシュオ、貴方達二人の担任。これ読んどいて。」

そう言うとトリエラは封筒から書類を出し、二人に渡した。

「一応、最終確認ってことだから軽く目を通すだけで構わないから。

さて、これからいろいろあると思うから忠告しておくわ。

転校生ってだけでも珍しいのにほかの大陸からってなるとなおさらね。

この学園での生活には慣れないことあるだろうけど頑張ってね。

私からは以上！なんか質問とかある？」

ジークとシルビアはお互い大丈夫と答えた。

「そう、なら入学式が終わるまで待ってね。それが終わったらクラスに案内するから。」

第二話

あれから少しだけ時間が経ち、三人は２－Ａにいた。
トリエラは扉の前に立ち、二人に話をし始めた。
「さて、お二人さん。準備はいいかい？
呼んだら入ってきてね。」
そう言うとトリエラは扉を開けて教室に入っていった。
「ジーク？」
二人きりになった途端、シルビアが話し掛けた。
「なんだ？」
「なんだろ、ワクワクするんだけど。」
シルビアは胸に手を当て、顔をジークへ向けた。
「だから何だよ。ほら行け、呼んでる。」
しかし、ジークはそれを一蹴した。
「何でよ。」
シルビアはムッとしたが、すぐに表情を正し、扉に手を当てた。

「レディファースト。」

「良く言うわね。」

シルビアは諦めたように扉を開けた。

二人が、教室に入ると歓喜が沸き上がり、それをトリエラが一喝して止めた。

「え～、今年からうちのクラスと共に過ごす。ジーク・ロイデンとシルビア・デュランドだ。二人共、挨拶を。」

「シルビア・デュランド
です。これから二年間よろしくお願いします。」

と、シルビアは挨拶とビジネススマイルで挨拶し、男子からの注目を集めた。

「ジーク・ロイデン。」

が、ジークはシルビアとは対照的にアッサリ終えた。

「終わり？あれで終わって：まぁいいか。
最後に一言、この二人は別の大陸から来たから、右も左も知らんだろうし仲良くやってくれ。二人は後ろの席な。」

トリエラがそう言うとまた歓喜が沸き上がったので、一喝して止めた。

二人は後ろの席に着くと周りの人には聞こえない音量で話始めた。

「ジークどうこのクラス？」

「凄いな。

獣人、あれはワーウルフだな。魔法使い、しかも良いとこの出だ。半聖天使、若干ランクは低いか？後は、魔族、悪魔、バンパイアか？巫女、死人までいるぞ。」

「さすがとでも言っておきましょうか。」

「後は様子でも見ておくか。」

「まぁ、そうでしょうね。」

二人は意識トリエラに戻すと話が終わっていて、教室から出ると同時にチャイムが鳴り響き、二人の席の周りを人が囲んだ。

「二人はどこから来たの？」

とシルビアの目の前の女子生徒。

「二人ってどういう関係なんだにゃ？」

と、猫耳獣人女子生徒。

「スリーサイズは？」

と、バカな男子生徒。しかし誰か手によって吹き飛ばされていった。

「‥‥」

「‥‥」

ジークとシルビアの二人はこういう経験は初めてだったので戸惑っていた。

「はいはい、皆ストップ。二人が戸惑ってるじゃないか。すまなかったね、僕はこのクラスの委員のエドワードだ。よろしく。」

そう言って、エドワードがシルビアに握手を求めようとしたとき、

「きたねーぞエド！そんな手使って麗しの女神に近付こうだなんて！」

吹き飛んだ男子生徒は机に寄りかかりながら立ち上がり、エドワードに言った。

「うるさいよ、滝沢。お前はいっつもそうだ‥。あぁ、悪かったね。彼は滝沢透、このクラスのバカだ。」

「おい！それはないだろ！もっと俺らしのがさぁ」

「そうか、忘れてた。変態ということを忘れていたよ。」

「違う！なぜ、そうなった！？」

「僕なりの君の印象なんだけどな。ブツブツ‥」

二人の会話が終わるの待っていたシルビアが口を開いた。

「それで、私達は置いてきぼり？」

「にゃはは、うちのクラスはこういうもんだにゃ。にゃーは梅森飛鳥、見ての通りのフェールキャットの獣人だにゃ。よろしくにゃお二人さん。」

「よろしく、梅森さん。」

「飛鳥でいいにゃ。シーニャン。」

「シーニャン？」

「くそう、いいなぁ飛鳥は。さっそく仲良くなりやがって。」

クラスの人々はもう少し交流したかったのだが、チャイムと同時に現れたトリエラによってそれは崩れた。

「ほらほら、お前ら。仲良くするのはいいことだが、本日最後のＬＨＲやるから席つけ。」

第3話

教卓の前で一息つき、先程まで配っていたプリントをまとめながらトリエラが口を開いた。

「さて、ＬＨＲはこれで終わり。よって、今日はこれで放課。と、いきたいとこだけど。今学期一発目！やるわよぉ！」

その言葉を聞いた２－Ａの人達ははしゃぎ出して、騒ぎだした。

「ねぇ、エド。これからなにをはじめるの？」

何一つ理解していないジークとシルビアは前の席にいるエドに話しかけた。

「そっか、二人は知らないんだったね。それは」

エドは話をし始めようとしたが後ろから現れたトリエラによって遮られた。

「二人とも来い。いろいろ説明するから着いてこい。そうだエド！後は任せた。」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

トリエラは二人を廊下に連れ出し歩いていた。

「で、何を説明してくれるんだ？」

「まぁ、そう焦るなって。どうだい？うちのクラスは？」

「私好きですよ、ああいう雰囲気。」

「俺は嫌いだ。何より、人があぁ多くいる空間が好きじゃない。」

「そうかい、それは何よりで。んじゃ、何から説明しようかしら。」

「そうね、これからなにをするのかしら？」

「んー、簡単に言うと戦闘ね。私のクラスは毎学期の始めの日に生徒がどれだけ成長したか、その戦いで見てるのよ。」

「その戦いっていうのは？」

「シンプルに１ＶＳ１ね。戦闘ルールに関してはもちろん世界共通のルールに乗っ取ってやるわ。ルールは知ってるわよね？」

「戦闘におけるダメージを直接的な肉体へのダメージではなく、フィードバックを限りなく小さくする魔法のなかで戦うやつだろ？」

「そうそう。個々のステータスの体力をライフとし、格闘ゲームみたくライフをゼロにしたら勝ちとするってやつね。」

「」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5873z/

聖眼の魔術師

2012年1月12日23時59分発行